

芸術によってお金を回す方法はあるのか

森村泰昌（美術家）

1

さだまさしの曲、『案山子』にこんな歌詞がある。

「寂しくないか、お金はあるか、今度いつ帰る～」¹

最近たまたま聴いた「さだまさし 石巻市の日和山復興イベント 2011 年 9 月 23 日」でこの曲を歌いながら、さださんがお得意のトークをやっていた。「お金はあるか」という歌詞にひっかけて、さださんいわく、

「お金っていうのは、なんだねえ……お金っていうのが世の中になけりゃあちよっと、悩みのほとんどは消えないか、つくづく思うねえ、今もみんなお金で困ってんだらうけど（笑）」

被災地でこんなあけすけなトークができるのも、映画『長江』製作のため大きな借金をした経験のある、さださんだからできたのだろう。28 歳の時に抱えた 28 億円もの借金地獄を、このときも次のように語っていた。

「28 億、金利も入れると 35 億だ、でも話は大きいほうがいいから、人びとには 40 億って言ってますけど」

冗談まじりにそう言ってのけ、「でも返せんだよ」と続ける。

「大丈夫大丈夫、お金のことはあんまり気にしないほうがいい。どうにかなるし、なんかかったら逃げりゃあいい、どうってこたないよ」（笑、拍手）

トークのこの前段も聴きごたえがあったが、しかし後半部分はさらに過激になっていて感心してしまった。というのも、さださんは話の内容をこんなふうにかきかえていったからである。

「まあねえ、『金は天下の回りもの』って言うけど、ウソだよ。どっかで滞らせているヤツがいるから。そういうヤツに天誅加えるにはどうしたらいいかって思ってね、いろいろ考えているわけ」

「ヤツ」とか「天誅」などという物騒な単語が飛び出してくる。さださんには、あからさまには言えないが秘めた怒りがある。それをグッとこらえて笑いに転化しているようである。

さださんが言うように、たしかにお金は天下に“回ってはいない”。どこかで滞っている。だから、“天下に回して”いかなければならない。これには私も大賛成だ。

2

私は日々、芸術ということをやっている。芸術なんてなんだか浮世離れしているようにも感じられる。だがもちろん、芸術家は仙人なんかではない。カスミを食べて生きているわけではない。フツウに食事をするフツウの人間である。おまけに作品作りっていうのも結構物入りな難物なのである。

「芸術家なんだからあんまりお金のことを言うな」。そんなわかったようでよくわからないアドバイスをいただくこともあるが、いやいや生身の人間であるかぎり、あまねく天下に回ってはいないように見受けられるお金のことは、芸術世界でもやっぱり切実な問題なのである。

3

こういうふうなことをあれこれ考えていて、えらいなあと感じいたのが、フィンセント・ファン・ゴッホだった。生前に売れた油絵は一枚だけだったと言われるが、この画家、絵を売りにくかったわけではない。売れる絵を描きたいとずっと願っていた。しかし私腹を肥やしたかったわけではない。弟テオからの多額の仕送りによって生活していたゴッホは、弟のお荷物になり続けるのは相当つらかっただろう。やっぱり自活しなければ……。

そういうこともあつただろうが、くわえて理想主義者のゴッホは、若い画家たちによる相互扶助的な制度作りも目ざしていたらしい。画家たちの協同組合みたいなものを作って、誰かの絵が売れたら、売れない画家にもその利益のいくばくかが回ってくるという助け合いのシステムの構築である。

4

芸術経済学というのは、芸術は投資目的としていかに運用可能かとか、文化貢献という一見無駄に感じられるリスクがもたらすメリットに注目してみるとか、そういう戦略的学問のことだと思われている節がある。しかし、雲の上のどこかで芸術作品が高い値段でグルグルと売買されて、お金があまねく天下に回っていかないというのは、なにかしら不健全な匂いがする。そこのところをしっかりと嗅ぎわけて、芸術とお金のまっとうな間柄を暗中模索する。ゴッホはそんな理想主義的な芸術経済学を夢見ていたのだろう。でも理解は得られぬまま、現実はたった

一枚の油絵が売れただけだった。

5

さだまさしさんとともに私も、お金のことはあんまり気にしないでおこうと思う。なんとかなるし、ならなきゃ逃げりゃあいいと覚悟を決めたいとも思う。でもそのように覚悟したうえで、ゴッホの理想をほんのすこしだけでも現実化させられたら、どんなにかいいだろう。どうやったら、水田に水が等しく行き渡るようないい感じのお金の回りかたになっていくのだろう。私は芸術家なので、芸術世界におけるそういういい感じのお金の回り方、回し方について、知恵を出し、工夫をこらし、実践の技を身につけていきたいものだ、わりと真面目に考えている。ハチャメチャな芸術は好きだけど、やっぱり芸術にはちゃんとしていてほしいこともある。

註

1 さだまさし作詩・作曲『案山子』1977より引用